

研究通信

No. 43

1982.7刊

仙台市片平丁75  
東北大學教育  
社會學研究室

初心を忘れないようにしよう

中村吉浩

木原が発足してから十年、最初の会を開いた仙台で今年の会が開かれるということになつた。この辺で一度しままでの経過を反省するのもいいことだと思うから、それには適当な場所だろう。

に、私たちが喜んで応じたのは理由があつた。私たちは「歴史家」として、またそのうち「経済史家」として村の歴史の研究をしていったのだが、いくつかの村について「経済」現象だけ抽出してみても、やはりそれでは不完全であることを痛感し、そのワクを脱するために一村の中でも何かも調べてみようという大胆不敵な計画を立て、岩手県煙山村調査に着手したところであつた。もちろんそれは大変なことである。そのとき、社会学者の、または民俗学者の、意見や成果を聞くことができそうだということは、願つてもないことだつた。専門分野の人たちが、相互にその意見を交換し、質問をだしあい、問題を出しあうなら、総合的に村の研究の進歩が推進されるだろう。社会学者の調査報告に経済的な問題が欠けているとみられるところは、われわれがお手伝いできよう。そういう話しあいの場ができると考へて、私たちは村研結成にとびついたの

であつた。その上に、各人が各地で、各自の問題や方法で村をみて  
いるのだから、おながいに「私の見た村」を報告しあえれば比較もい  
ろんな意味でできるだろうという期待も一ぱいだつた。こういう考  
えを、当時の結成の参加者は、例外なくもつていたのである。少  
くも私たちはそのつもりだつた。

それから十年、私たちの期待は、ある程度はむくいられた氣は  
するが、必ずしもそうでない傾向も出てきたようと思われる。何  
をやつてしよう、村という点では共通の話題になるはずだけれど  
その共通の場がそこに作られるより先に、あんなことには興味がな  
いとか、あれではしようがないとかいつて、たがいにそっぽを向い  
てしまうという場合が多くなかつた。批判という美名で、自分のワ  
ク外の研究を否定することはなかつたか。現況をやつている報告に  
歴史家は背を向け、歴史をやつしている報告に経済学者はあくびして  
いるということはなかつたか。そりでなかつたとはいいけないと思  
う。のために報告者はそれそれに分化してしまることが感じられ  
て、共通テーマを設定しようという動きになつたと思う。共通テー  
マ、共通課題ということは、実は村研では村という点であらかじめ  
あつたのである。それをふまえた上で、さらに問題をしぼつて共通  
の問題をやつてみると、それは当然ともいえるが、そもそも基底に  
ある村という共通課題がうすれ、忘れられて、しほられた共通課題  
でむりやり討論の場を作ろうといつては、それはむりやりに  
会の分裂を防ぐだけのものになりきがるだろう。そんな傾向を私た  
どは感じてゐる。今年の共通課題では参加しても、いふことはないし  
課題であろうと、村に関するのだから、何かいえるし聞いて教  
えられることもあるうといふのでなければ、村研の存在の意義はう  
されてしまうのみならず、悪い結果さえ生れるであらう。

うのが私の念願である。そして私の個人的な希望をいえば、いろいろな場所で集つて、各人が各地でみている村の、いろんな角度からの姿をふくぞうなく話しあつて、村に対する理解を深めてゆく、そういう談合という心がまえで集まるのが本当の意義ある会であると思うのだがどうだろう。のんきなことをいつていてお考えの方もあるう。そんなとりとめのない、ひま人の会合は無意味だという方もあるう。しかし、私はそのようにのんきに見え、とりとめなく見える話の中で、もつとも基礎的な、またもつとも今日的な問題が、真に理解されてゆくものであろうと確信している。それにはもちろん、眞にモノグラフィックな報告のだし、話しあいであるべきだという前提はある。空虚な議論をしあうのは、威勢がいいから、それ故に学問的であるような外観は呈するけれど、むしろ悪い意味でのんきな話で、地につかぬ時代離れしたやりとりに終るだろう。

これに反して、外観的にはのんきなような報告でも、具体性をもつた、モノグラフの報告交換こそ、現在にもつとも大切な問題をみつけてゆく生産的な談合になると私は考える。これは当番としての仙台の会員が大よそ一致している考え方たと思うが、私は私なりの文字通りの私見として、会員諸君の御検討を願いたいと思う。